

MOVIN'

高岡デザイン情報誌【ムーヴィン】

〔特集〕 Takaoka Design Movement ⑤

高岡市デザイン・工芸センター開館1周年記念
「素材と技術展」&シンポジウム開催

北陸の素材と技術から 地場産業の商品開発を考える

〔私のグッドなプロダクト〕 松永 真
〔技・ヒト・モノづくりの情景／指物木地師〕
〔私と高岡クラフトコンペ〕 太田真人

10
2001 VOL.

ISSN 0918-7111

高岡デザイン情報誌【ムーヴィン】

VOL.10 2001年3月31日発行

写真提供・取材協力

太田真人
株式会社オナガメガネ
株式会社笠原昇雲堂
株式会社兼吉製作所
金堀正一
国立高岡短期大学
小林工業株式会社
サンエツ金属株式会社
三協アルミニウム工業株式会社
シーケー金属株式会社
新宮尚子
SUKENO
高岡漆器株式会社
高岡漆器青年会
高岡漆芸みどり会
高岡市都市整備部建築指導課
高岡市民病院
財団法人高岡市民文化振興事業団
高岡商工会議所
株式会社タカタレムノス
株式会社竹中製作所
社団法人富山県デザイン協会
株式会社ニュース・インターナショナル
平野哲行
ホクセイプロダクツ株式会社
北陸アルミニウム株式会社
株式会社北計工業
増田尚紀
益田文和
松永真
源謙次
山田節子
フシマイヤー株式会社
(50音順・敬称略)

STAFF

Published by

高岡市デザイン・工芸センター
〒939-1119 高岡市オフィスパーク5番地
TEL0766-62-0520
<http://www.suncenter.co.jp/takaoka/>

Executive Editor

Masayoshi Kimura

Art Director

Hideaki Souma

Designer

Yukiko Azuma

Takako Nishikawa

Ayano Imada

Writer

Satoshi Kitayama

Azusa Hase

Rie Morinaga

Mahiro Yoshizaki

Photographer

Youichi Ishihara

Tomoaki Kanatani

Printed by

相互企画印刷㈱

MOVIN'【ムーヴィン】は、MOVINGの略形で、「動く」・「進むる」・「感動させる」という意味を持ちます。

デザイン情報誌【MOVIN'】は、高岡の街や人、企業そして行政の動きを「デザイン」というアンテナでキャッチ、ユニークな切り口でご紹介します。

また、MOVIN'は高岡独自のデザインパワーを市内外に発信していくとともに、高岡の未来に向けて「新しいデザインの動き」を生み出していく情報誌を目指しています。

街角デザインフォーカス

「高岡市民病院」は、昭和26年の開設以来、地域の基幹病院として利用されている。その後、施設の主要部分は昭和41年に建築され、幾度か増改築を重ねてきたが老朽化や狭隘化などにともない改築計画が進められていた。新しく生まれ変わった高岡市民病院は平成8年に着工して以来ほぼ4年の歳月をかけて平成12年に全施設が完成した。建物は地下1階地上6階建てで、最新鋭の設備や高度な医療機能、そして緊急輸送用ヘリポートが整備されている。

一方、パブリックスペースは人にうるおいとやすらぎを感じさせる空間になっている。3つの棟を結ぶゾーンでもある外来診療棟のアトリウムは、その名の通り中庭のある空間として、天井から降り注ぐ自然光と木製のフロア、そしてグリーンが温もりと開放感を感じさせてくれる。階段や手すり、ベンチにも木の素材が多用されて、視覚的な雰囲気だけではなく手で触れたり、歩行時の感触や靴音、微かな木の香りなど五感にやさしい効果を生みだしている。



※表紙写真:高岡市民病院(アトリウム)



山田 節子 益田 文和

㈱TWIN(トゥイン)代表、㈱東京造形大学教授、株式会社
東京生活研究所ディレクター ブンハウス代表取締役
地場産業や固有性のあるラーニングスタイルをテーマに各種
の企画・制作・販売を行なう。1992年から新潟県央地域の地場産業の
シンクタンクとして生活フロア、食品フロアのディレクションを通じ、長年提案を続
けている。

「素材の選択は重要なことです。工業技術の粹

を集め、一方では軽量化や機能を追求してユ
ーザーニーズに応える。また一方では、自然の素
材を使って温かさや優しさを出す。従来の車い
すの機能に、プラスαをもたらすことができる
のは素材と技術をいかに組み合わせるかにかか
つては、これは他の商品開発にもいえるでし
ょ」と述べ、「確かに今の時代、商品はなかなか
売れない。でも、熱い思いで開発した商品の素材
や技術の特長、あるいは、こんなふうに使って欲
しい」というメッセージを伝える努力をしないと、
新しい商品は育たないのでないか。いいものは、
売れるんです」と力説された。



石川県の展示コーナー

固有の価値を持つた文化的資産は世界にも通用する

商品開発について、産地での経験や感想が述べられた後で、それまでに紹介された話を踏まえて二人のトークセッションが行われた。口火を切った益田さんのコメントから紹介する。

益田 先ほど紹介した三条の工具開発では、素材を変えてもいいから、軽くて強い工具をつくりたいという、はつきりとした目標がありました。これは工具を使う側にとっては明らかなメリットです。商品開発に当たっては、機能的なニーズは発見されやすい。でも産地での開発はシリーズ発想的になるきらいがあつて、本当のニーズ、消費者のニーズがどこにあって、どれくらいの大きさなのかがわかりにくい。産地からは見えにくいニーズを、どうやって見るかは、各産地が抱える

ランドを立ち上げ、製造責任を明確に持つことにしたのです」と語るのは同社の小林貞夫さん。小林工業がオリジナルデザインの必然性に目覚めたのは昭和二十年代の後半のこと。それが具体的な動きとなつたのは三十年代に入ってからである。今も売れ続けている「1100番」というナイフ・フォークのシリーズは三十六年に開発したものだが、業界で初めてGマークに輝いた。「これはオリジナルな商品を開発しようと奔走していたなかで、県の産業工芸試験場から最初にいただいたデザインを商品化したものでした。ただ当社は、デザインをいただいてすぐに商品化したのではなく、試作品をつくり、五〇〇人の方々に実際にこれを使って食事をしてもらい、食べやすい角度、スープがおいしいと感じる量、手当たりのよさなどをリサーチして、何度も型を削つくり直した」そうだ。

この時の試行錯誤が「1100番」に結びつき、オリジナル商品の誕生となつたのである。小林工業には今もこの時に培つたノウハウが生きている。そうだが、「デザインを特化してきたなかで、コストパフォーマンスも含めてどんなメリットがあったか、また何が消費者に受け容れられたかを今後に生かすために、現在、これまでのデータを整理している」という。

新潟県から参加のもう一社の兼古製作所は三条市にある。燕同様、鍛冶業から始まつた三条の金属加工業は、鍛造技術を基盤とした作業工具をはじめ幅広く発展している。そのなかで兼古製作所は五〇年前に創業した時は、ドリルの廃材を利用して鎌の刃先をつくることからスタート。その後、ミシンや農機械の付属用の作業工具を大量に生産するようになつた。兼古耕一さんは「当時は量を追いかけて会社の基礎をつくついたような時代だった」と振り返る。

ところが二〇年ほど前、三条出身の金物商社がホームセンターとして全国的に展開するころか

共通の課題でしょう。

山田 百貨店を舞台にディレクションしている立

場から見ると、事業などでつくられるものは今までと変わるものでなければならないという発想がある。そういう商品は催事として一定期間、陳列するはいいが、プロパーの商品として置こうとする、サイズが合わない、形が特殊でシリ

ーズ商品がない、などの問題が生じる。こうなると、「やっぱりこの商品は外しましよう」となりやすいのです。それと有名なデザイナーに依頼して商品を開発する時は、「先生がデザインしたものだから頑張つてつくらなければならない」と思がちですが、そうではなくて、自分たちの技術や素材を使つたらこうなる」と、デザイナーに提案することが大切でしょう。相互に会話していくなかでつくっていく状態がいいと思います。

益田 私もそう思う。新しいデザインを起こす時、東京とか海外からデザイナーを連れてきて「あなたたつくて」というケースが多くあります。が、基本的にはそれは間違いでしまう。産地には産地の開発力が絶対に必要で、そこでデザイナーが育つて活躍する必要がある。イベント的にあるいはパフォーマンスとして外部のデザイナーに依頼するのもいいでしようが、産地にとって本当に重要なのは、その地域でものづくりが継続的にできる底力を持ったデザイナーが何人いるかということなのです。いろんな産地と関わってきて、これを切実に感じました。

山田 そういう意味では、北陸四県は熱心で蓄積がある。昔富山の羹売りは、各地を売り歩いて情報を持ち帰っていた。そして翌年は、もっとお客様さんがほしがるものを持っていった。この文化を現代に置き換えるならどうなるでしょうか。こんな体制づくりをしたらしいのです。

益田 確かに北陸は層が厚い。ですから県外からきて、腰を据えてものづくりに取り組もうとする人も多くいると思う。これからは新しい血

を入れながら産地を形成していく、産地を再構築していくことも必要でしょう。



平野 哲行
株平野デザイン設計代表取締役社長
イリノイ工科大学建築学部卒業。ブリッジ＆ネットワークをスローガンに、産学官をコーディネートし、事業領域の拡大や新市場創造に傾注。デザインを核にビジネスコンサルティング、商品戦略、流通形態の構築などを展開する。

Part 2 オリジナルデザインの開発から性能も世界トップのものをを目指す

平野哲行さんのコーディネーターのもとで進められたPart 2のテーマは「市場開発の壁をのり越える」。地元で、ものづくりの最前線に携わっている方々が興味深い事例や企業の姿勢を紹介し、その後ディスカッションを進めながら地場の企業の復興を探つた。

新潟県からは、県央の燕・三条地域から二社の関係者が参加。もともとこの地域は鍛冶業に端を発した金属加工業が盛んで、歴史の推移とともに燕はより生活用品に近い製品をつくり、片や三条は金属製の作業工具などを生産するようになつたのである。

今こそ燕市は洋食器の街として知られていますが、変化の激しい波をかぶり苦しい時代を繰り返してきた。そういうなかで大正十四年、灰均

しを見たある問屋が「先の方を切ればフォークに

のなかには売れている商品を持ってきて、同じものを安くつくれ」と持ちかけてきたところもあります。でも当社はそういう話は断りました。

アメリカ中心に洋食器を売つていました。バイヤーのなかには売れている商品を持ってきて、「同じものが問屋に採用されて小林工業は洋食器メーカーの一歩を踏み出した。

「当時の社長は本当に腕のいい職人で、いいものをつくれば間違いない」という品質が今も受け継がれている。戦後しばらくの間は一〇〇%輸出でアメリカ中心に洋食器を売つっていました。バイヤーのなかには売れている商品を持ってきて、「同じものを安くつくれ」と持ちかけてきたところもあります。でも当社はそういう話は断りました。

それで昭和二十二年に「ラフキーウッド」というブ



一二三吉勝
株北計工業取締役部長
兼古 耕一
株兼古製作所代表取締役社長
小林 貞夫
小林工業専務取締役
小永 幹夫
株オナガメガネ企画室長
竹中 時造
株竹中製作所代表取締役社長
国本 吉隆
高岡漆器株代表取締役社長

技術や素材の開発、工程の工夫で大企業との競争も可能になる

石川県からは北計工業という電力会社向けの計測機器を中心につくつていける企業から、色を音声で知らせてくる色識別装置・カラートーク（特許取得）の開発を担当した一二三吉勝さんが、その開発の経緯などを紹介した。

カラートークの開発は、平成九年に石川県が発足させたパリアフリーエンブレム会議部会に北計工業が参加した時にさかのばる。部会のメンバー五社の担当者とともに、聴覚障害者センターなどを視察した時、一二三さんは視覚障害の女性から「色を知りたい」という要望を出されたそうだ。調べてみると、「靴下の

色が合っていなかった」とお葬式に赤い

ネクタイをしていった」など、視覚障害者の色の識別に対する欲求には相当なものがある。

類似品も、かつては存在したが、色の識別が正確なため調査した時点では生産は中止。工業製品では、カラーコピーのスキヤナなどに使われている光検知器が、センサー部分だけで三〇万円。色識別装置をシステムとしてとらえると、視覚障害者が生活補助機器として使うには高価なものになることは容易に予想がつく。そこで北計



小林工業「1100番」
およそ四〇〇〇種類のドライバー
本のベースで生産。通常のプラス・マイナスのドライバーからY型や六角、ビット関係のドライバーの心棒を利用した高機能ドライバー、さらにはドライバーの心棒を利用したヘッドを交換できるハンマーなど幅広くつくっている。また、海外からの輸入品との差別化を図るために細かいバーツが入れられるようケースを工夫したりもしている。



こうして幅広くドライバーを中心とした作業工具を一貫生産している兼古製作所だが、業界においては後発組に属する。そのハンディ克服する機会で、商品開発の励みになる」と語り、そこで「当社はGマーク選定審査会に、毎年商品を出すことを目標にしています。社内のデザイナーと東京のデザイナーが協力し商品開発をして

いるが、それが社員教育の一貫になつていると「う」と企業としての方針を明らかにした。同社では、一五年連続Gマークを受賞。アイテム数としては三五を越え、性能も世界でトップレベルのドライバーを生産している。また現在は、なめないドライバーの開発などにも取り組んでいる。

その開発の経緯などを紹介した。

カラートークの開発は、平成九年に石川県が発足させたパリアフリーエンブレム会議部会に北計工業が参加した時にさかのばる。部会のメンバー五社の担当者とともに、聴覚障害者センターなどを視察した時、一二三さんは視覚障害の女性から「色を知りたい」という要望を出されたそうだ。調べてみると、「靴下の

色が合っていなかった」とお葬式に赤い

ネクタイをしていった」など、視覚障害者の色の識別に対する欲求には相当なものがある。

類似品も、かつては存在したが、色の識別が正確なため調査した時点では生産は中止。工業製品では、カラーコピーのスキヤナなどに使われている光検知器が、センサー部分だけで三〇万円。色識別装置をシステムとしてとらえると、視覚障害者が生活補助機器として使うには高価なものになることは容易に予想がつく。そこで北計

めの研究を大学と共に進めたのである。

もともと北計工業には、繊維を染めるための染色液調合機器の開発の経験がある。「何色に染める」と技術を、何色になつてあるか識別する」とに応用すればいいから、これはできるはず」と確信したという。

開発には三年を要した。カラートークは赤、青などの二三の基本色に、明度および彩度に関する修飾語(鮮やかな、明るい等一種)と色相に関する修飾語(赤みの、青みの等五種)を組み合わせて、現実的な二〇色に対応し、あらかじめ数カ国語の色表現が組み込まれている。ユーザーは自分が使う言語に切り替えるだけで使えるので、発売は世界的なものになる予定である。

また、福井県から参加したのはオナガメガネで企画デザインを担当している小永幹夫さん。明治時代に始まつた福井のメガネ産業は、国内生産高の九五%を占めるまでになつたが、最近では海外でつくられた安価なメガネが市場を席捲しつつあるといふ。小永さんは「当社は販売力や価格では大手のメーカーにはかないませんので、企画で勝負することにしています」と独自色を打ち出していることを強調された。

そして小永さんが自信を持って紹介されたのがバルブスシリーズのフェザーチタン(特許取得)。



北計工業「カラートーク」の試作段階でのCG画像

オナガメガネ「フェザーチタン」
ネジの代わりに小さい円筒形の樹脂でフレームを固定し、蝶番の役目もさせるという画期的なもので、素材もβチタンを使用して二・六gという超軽量のフレームができ上がった。また、通常のフレームの製造には二〇〇ほどの工程があるが、フェザーチタンでは五〇ほど。このため納期の短縮とコストを抑えることができ、またレンズの形の変更が可能なのでバリエーションの拡大には柔軟に対応できるという。

「大手メーカーの商品と市場で競争して生き残るためにには、

中小企業には違つた努力が必要です。作業の工程や技術、素材の改革をしていけば、外注先にあまり負担をかけることなく、いい商品ができる。商品開発に当たつての企画やデザインには、作業工程や技術を知ることも大切でしょう」と小永さんは指摘された。

そして地元高岡からは、伝統的工芸品をつくりつづけている銅器の竹中製作所と漆器の高岡漆器の社長が出席された。高岡銅器は昭和二十年代までは、火鉢、瓶かけなどを中心に床の間に置く七福神や恵比寿・大黒などを生産し、当時は問屋が今日でいうコンテナで三台分とか五台分をまとめて買つてはいたほどであった。その後、高岡銅器は美術装飾品に比重が移り、アメリカを中心とした輸出が堅調に推移。竹中時造さん自身もワシントンで飛び込み営業をし、その場で商談がまとまるケースがあったという。



ところが現在はアメリカ向け輸出はゼロになっている。以前、取引きしていた社長は「一ドル二〇〇円になつたら売れる。三〇〇円なら飛ぶよう売れるだろう」と竹中さんに答えるそつだ。

「いいものをつくるても、安くなければいけない。安くするのがデザインではないかと思う。当社も社内にデザイナーを置き、また嘱託のデザイナーと協力して商品開発をしているが、製造工程の改革やデザインの角度からコストダウンが困難な場合もある。そこで、最初の商談に出席していた常務は断りました。他の会社も断つたようです。

でも私は、これはチャンスだと思った。国内の製造・加工の現場を組み合わせて調整したところ、コストダウンできたのです。それで、無印良品さんに再度話を持ちかけたら二・五万個の注文をいただきました。この商品はヨーロッパで販売していく、結構売れているから、追加があるかもしれないという。今回の商談では、もちろんデザインも大事な要素だったので、価格が合つたことが大きな問題だったと思う。日本はやはり輸出でマーケットが拡大できるよう、コストダウンを図らなければならない」と強調された。

銅器をめぐる環境は年々厳しいものになつてゐるが、竹中製作所では池田満寿夫さん、岡本太郎さん、松永真さんなどの作品をプロンズにしたり、金属加工の技術を応用して、門扉・フェンスなどのエクステリアも生産。昨年は、イ

ターネットによる商品の販売にも踏み切り、「予想していたより、売れている」と新しい販売方法にも期待を寄せていた。
高岡の漆器業界も、厳しい環境に置かれている。昨年五月にオープン。メーカー自らが販路を拡大し、活路を見い出そうとする意気込みがうかがわれる。

「高岡市には全国のクラフトマンが注目するクラフトコンベがあります。毎回二〇〇〇点あまりの作品が応募され、全国から多くのクラフトマンが高岡にこられるけど、展示期間が終わつてしまふと、もう見ることができない。だったら通年でそれらを展示販売し、合わせて市場や価格の動向、



福井県の展示コーナー

高岡市の展示コーナーの一部



またお客様の声を聞く場として小売の現場を自分たちでも持つと考え始めました。当社も漆器製品のデザイン開発は積極的にやってきました。しかし工芸品は性能などで商品価値が計れず、マーケットはぼんやりしている。だから、金科玉条のようにやつてきた新商品の開発もほとんどうまくいくつません。商品の大半は都市部のデパートで販売していますが、秋の商品の入れ換えの時期がくると頭が痛い。周りの漆器や食器と違和感があるというので採用されないことがある。また、徐々に売れ始めても商品を入れ換えなければならないことが多い。漆器は金属加工のように金型がないため形を変えやすいといふメリットがありますが、売れ筋の商品が出るといろんな产地で類似品をつくって、商品の寿命を短くしているようなところもあるのではないか」

自らがショップを持つことで、その解決の糸口を探っているようであった。

「コーディネーター役の平野さんは、デザイン開発を核に各種の商品開発、市場開発のコンサルティングを手がけている方だが、当日紹介された事例をひとつ紹介しよう。

コダックは日本ではフィルムメーカーとしては

「Gマーク」を以下のように説明した。
「われわれはシェア拡大のために、一〇年間の戦略を立てました。そして最初に出したのがDC4800です。これはスター商品として開発しました。マニア向けのカメラですが、技術と高級感という姿勢でいる。そうすると「コダックは変わったね。フィルムだけじゃなく、技術も高級感も

なじみ深いものの、映画用のプロセッシング機器やカメラをつくっていることはあまり知られていない。アメリカでは四〇%ほどのカメラのシェアを持っているにも関わらず、日本ではわずか数%。そこで相談を受けた平野さんは、コダックのカメラのシェア拡大のための戦略を立てたのである。

その戦略のもと日本の市場に投入された第一号が、昨年七月に発売されたDC4800というデジタルカメラ(Gマーケット受賞)。三・一メガの解像度、三倍の光学レンズを使ったミニアームカメラで、同レベルの輸入力を

メラのなかでは技術的には上のクラス。銀塩の高級コンパクトカメラの仕様や操作性を持つているため、九万九八〇〇円に設定された価格は高く感じられないらしい。

その後二ヵ月後に、今度はその小型版としてDC3800を発売。従来、日本のカメラ市場ではコダックは五〇位以内に入つたことがなかつたが、この機種は他メーカーの同型機種と上位争いをするまでになつた。

コンサルティングに携わった平野さんは、プロモ

「大企業が培つたノウハウを中小企業が利用する時代がくる」と日本漆器のクラフトショップコーナーの写真

あるいいカメラに対する認識が変わつてくる。その上で量産品の小型版を出すと、コダックに対する市場環境が変わりつつある時ですから、注目を集めても販売される。新商品は売り出すタイミングで、売れ方が変わりますから、われわれは初めてこれを狙つていました」

続いて七名によるディスカッションが始まるのですが、平野さんの「オリジナルについてどう考えているか」の問い合わせから話が発展する様子を再現してみよう。

小林 先ほども申し上げましたが、当社はバイヤーのいいなりになるのが嫌でした。それと、これは少し俗っぽいのですが、先代の四代目が昭和二十年代の後半に商用で海外へ出かけた時、「何を盗みにきた」と、たまたま飛行機で隣り合わせになつた人にいわれて、デザインの必要性を痛感したのです。オリジナルブランドを持つとうと立ち上げたのは、こうしたことが背景にありました。

兼古 同じような経験は私もあります。当社も商品は独自につくっていますが、それがどう評価されるかを知りたくて、Gマーク選定の審査会に毎年出品することを課題にしたのです。日本のGマーク商品は海外でも相当知られていますから、オリジナリティのある企業だと印象づけるにはいいようです。

竹中 当社でも、Gマークに胡座をかいていたらダメで、コストを出しても、デパートの売場にも並べられないということが何度もあります。商品が売場の雰囲気に合わない、流行に合つてないなどの理由があつたようですが、皆が同じものをつくつてもしようがない。店はまだ立ち上げたばかりですが、お客様の声を商品化に役立てたいと思います。

日本 新しく商品を出しても、デパートの売場にでも並べられないということが何度もあります。商品が売場の雰囲気に合わない、流行に合つてないなどの理由があつたようですが、皆が同じものをつくつてもしようがない。店はまだ立ち上げたばかりですが、お客様の声を商品化に役立てるためでしたね。

メラの修理屋さんから電話がありました。あるカメラの修理屋さんは、「軸が細い力が均一にかかり、軸は細い方がいいだろう」と思つていて。ところが修理屋さんは、「軸が細い力が均一にかかると、機器に力がかかりすぎてダメになる」と、非常に説得力のある話をしていました。これがきっかけで、どこにもなかつた軸の太い精密ドライバーをつくったのですが、評判



お店に入ると「お茶でもどうですか」とカウンター越しに太田さんが迎えてくれた。慣れた手つきで、ヤカンから急須に湯を注ぎ、ジャスマシンティを入れる。

「こうやって、料理をしたり器を洗ったり…、生活することが好きなんです。グラスに花を生けていて、ああ、大きな花器も欲しいな、と思って花器を作つたり。そうして暮らしを整えていくことが好きなんですよ」

現在は自宅と、その一階部分を改

装した「器と喫茶の店・はねはね」、そ

して車で一〇分ほどの場所に借りて

いる工房を行き来する日々。どちら

も周囲は緑豊かで、中も明るい木の家

具であふれている。機能的でありなが

ら適度に生活感がある、居心地のいい

空間。

「仕事と生活は近いほうですが、私にと

っては自然なんですね」

そんな太田さんの作品は、すべて彼

の実生活が原点になっている。例えば、

お店の雰囲気にも合う照明が欲しくな

り、それが今回のグランプリ受賞作

「a peel of light」のシリーズを作るきっ

かけになった。

「東京に落ち着く前は、金沢で制作

活動をしていたんです。そこで知りあ



わたしと高岡クラフトコンペ

5 太田 真人 ガラス作家

高岡2000クラフトコンペグランプリ受賞者

仕事と暮らしは近いほうが自然なんです。

つた人たちというのが、伝統文化を大切にしながら、工芸品に料理を盛つて、花を生けて、と毎日さりげなく使つていて。私も、こんな風に暮らせたらどんなにいいだろう、と思つたんです。その中で感じたことを形にしていけたら」と

辺りの空気を和ませ、どんな空間で

どう使おうか、と想像力をかき立てら

れる太田さんの作品のベースも、暮ら

しを楽しむ術を心得た金沢の人たち

に出会えたからこそ生まれたものだ。

「ガラスの器に汁物もどんどんよそつ

て使う人、布で磨いて大事に飾つてお

く人、いろいろいます。でも私は、暮ら

しの中に自然に溶け込み、なじむくら

いのものが良いと思うので、毎日しきりと使って欲しいんです」

使うことが第一だから、シンプルで、

しかも手になじむデザインにこだわ

っているのは、ガラスの自然の持ち味を

生かす、ということ。

道具を使って無理に曲げたりするの

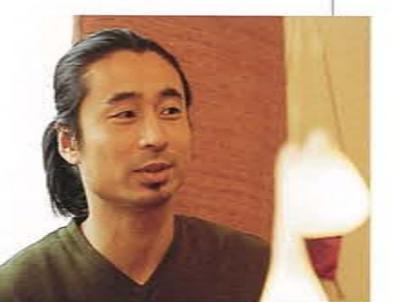
は嫌いです。自然の力に逆らわない、

ともで言うのでしょうか。下に向けて

「器と喫茶の店・はねはね」(東京都杉並区)
器と喫茶の店・はねはね(東京都杉並区)

は嫌いです。自然の力に逆らわない、ともで言うのでしょうか。下に向けて

「デザインもやるし、ガラスも吹くし、家具を作つたり、陶器を焼いたりすることも大好き。好きなこと、やりたいことがたくさんあって困るくらい。でも、人から強制されることと違つて、自分の暮らしの中で楽しいと思うことに決まりはないし、あせらず、のんびりと自分のベースでやっていきたいと思



太田 真人 (おわた まさと) ガラス作家
1993年 多摩美術大学クラフトデザイン科卒業
1993~97年 新島国際ガラスアートフェスティバルにティーチング・アシスタントとして参加
1993年 金沢卯辰山工芸工房修生となる
1996~97年 同工房修了後、金沢おしが原工房にて制作
1996年 日本クラフト展優秀賞
1997年 「96新島国際ガラスアートフェスティバル」より奨学金を受け、ビルチャック・ガラス・スクール(米国・ワシントン州)を受講
タレンテ97・タレンテ賞(ドイツ・ミュンヘン)「器と喫茶の店・はねはね」をオープン
1998年 「プロジェクト30」インテリア・コーディネイティ及び照明器具制作
1998~2000年 MCグラスラボ、スタッフ
2000年 高岡クラフトコンペグランプリ

第26回デザインセミナー (平成12年11月10日開催)

主催:高岡クラフトデザインネットワーク

「つくり手の生き方を売る」

鍛金家・デザイナー 増田 尚紀



伝統工芸の産地は、全国的に厳しい状況を迎えています。私のいる山形も同じで、生産が伸び悩んでいる原因としては、ライフスタイルの変化が消費者離れの最大の要因と考えられており、PRの不足や流通機構の問題点も指摘されています。その対応策としては、常設展示場の建設、デザインなどの研究開発支援を行政に要望するのが一般的なことでしょう。また後継者不足の問題も重要な課題として取り上げられ、伝統工芸品づくりの体験施設や職業訓練施設での訓練が希望されています。

一二三 確かにカラートークは隠れたニーズを商品化したものですが、最初の二年間は社内でもほとんど関心を持たれませんでした。視覚障害者の方々の熱意に支えられて商品ができ上がったようなものです。ところが開発の段階がついて試作品を福祉機器の展示会に出したりすると、マスクの注目も浴びて、あつという間に視覚障害者の方々の間に装置のことが伝わってしまいました。また大手の企業への外注の件ですが、当社では

手取川のそばにあるソニーの工場に、人工透析機用の基盤を毎月一八〇枚つくつもらっています。世界のソニーが一八〇枚の基盤をなぜ…、と思うでしょう。でもこれはソニーだからできることで、同工場では月産二二〇万枚のプレステーションをはじめとする各種の基盤をつくついて、小ロットでも安くつくる技術を持っているのです。

* * *

七名によるシンポジウムは、それぞれ業種や業界環境が異なるため、多様な事例や意見が飛び交つたが、平野哲行さんの次のまとめて締めくくられた。「これらの時代は、ハイクオリティな部分で技術や素材を提供し合うようになります。自分の生活のなかで自分が作ったものを使ってみたいか、と視点を変えるべきなのです。PR不足についても同じです。もの自体に魅力がないのにPRしても仕方がありません。手仕事というのは、単にものを売る商売ではないはずです。つくり手が、自らのライフスタイルを通じて、自らの価値観でもつくる。そして、それに共鳴していただいて新しいニーズを生み出していく。言葉を代えると、つくり手の生き方を形にし、それを売っていくということではないでしょうか。

後継者の問題も同様に、視点を変えてみたらいいのです。ある産地で、県外から多くの弟子入り希望者があったものの、ほとんど希望はかなえられなかった。どうやら技術を身につけたら若者が去っていくのではないかと危惧したのですが、技術はもともと盗むもので、その繰り返しで伝承されにくものです。また身内、特に息子や娘に継がせたいという思いも強いようですが、その仕事に対して情熱と才能があれば、本来なら誰でもいいはずです。血縁だけにこだわっていたら、伝統工芸に未来はないといつても過言ではありません。

地域の歴史や風土に育まれた伝統工芸は、優れた文化といえるでしょう。その伝統工芸も、本来決して保守的なものではなく、技術や技法が生まれ発展してきた時代背景を考慮してみると、極めて革新的なソフトやハードを併せ持っているものです。固定観念から脱し、外に向かうことが新たな伝統をつくり出す一步になるのではないでしょうか。

プロフィール／1949年静岡県生まれ。大学卒業後、恩師の武蔵野美術大学教授・芳武茂介氏のアシスタントとして5年間、全国各地の地場産業のデザイン開発を手がける。'77年に山形市に移住。20年にわたり菊地保寿堂にて600点におよぶ自身デザインの「WAZUQUU」ブランドを確立。'97年に独立し鏡心工房を設立し、鉄、アルミ、ブロンズ等の素材を中心に鏡物のデザイン、製作、流通を一貫して手がける。第18回全日本中小企業輸出見本市・中小企業長官賞(77年)、第27回国井喜太郎産業工芸賞(2000年)など数多くの賞を受賞。

色の時代になる」といわれていた。これは決して楽観的なことをいつているのではなく、大手企業が培った技術を、今度は中小企業が使うチャンスがあるからです。コストダウンばかりでなく素材や技術の開発にも弾みがつくことが予想される。そうすると、これからは本当の意味での情報交換が必要になる。

要はアイデアなのです。アイデアがあれば、自

社に生産ラインがなくても製造できる。今日の話の中でも、素材の特性を生かす、素材の組み合わせを工夫する、製造の工程を変える、ユザーの不便を解消する、売り方を考える、売る時期を考える、等々いろんな事例がでました。市場の壁はこういう一つひとつ積み重ねでのり越えられると思います」



富山県の展示コーナー



技・ヒトモノづくりの情景

【第五回／指物木地師】

シユツシユツと一定のリズムを刻みながら、使い込まれた鉋が板の表面を往復する。

新しい鉋ケズが削り出されると同時に、粗削りの板が計算された形状に近づいていく。何枚もの板を組み合せて箱や盆などに仕上げる指物木地師の仕事には、高度な設計のノウハウが欠かせない。熟練した職人は、CADで表現することが難しい微妙なアールも、関数や規矩術で求められる勾配も、経験で培った独自の方程式で割り出してしまう。

それをディテールに至るまで正確に再現するのが、精緻を極めた手技だ。

視覚や触覚というセンサーがコンピュータがコントローラーの狂いの逃さず、無数の道具を駆使して作品の精度を高めていく。

指物木地師の仕事

指物とは、木材を加工してタンスや机、箱などに組み立てるということをいう。金場正一氏は、主に小箱や盆など漆器の木地を手掛けている。今では、漆器の产地・高岡にも残り少なくなった指物木地師だ。木特有の香りが漂う作業場には、大型の機械がいくつも据え付けられていて、その片隅

に四〇年以上は使い続けてきたという作業台が置かれている。木材の選定から設計、木取り、加工・組立までを一人でこなすというだけに、道具や機械も多種多様だ。とりわけ鉋は種類が多く、必要に応じて最適なものを補てんしながら、作品の形状や削る箇所に合わせて使い分ける。どれも金場氏の手づくりだ。壁に所狭しと並べられた鉋は、職人としての歴史の重みを感じさせてくれる。

機械も道具のひとつ

かつては、すべて手作業で賄ってきた金場氏の仕事だが、現在では機械に頼る工程も少なくないといふ。指物木地師は、何よりも正確な仕事を求められるが、短納期の量産品となると手作業では限界がある。高品質を保ちながら速く多くつくるためなら、機械を活用するに越したこ

シーン

とはない。「使えるものを工夫して仕事にいかすのが職人。鉋も自動鉋も、職人の手で操作することに変わりはない。要するに、機械も道具のひとつということ。だから、これから職人は、機械を熟知していないとやっていけないと金場氏はいう。

勘という高度な計算術

作品を構成する板は、ディテールに至るまで設計ミスが許されない。「留め」と呼ばれる板同士の接着面ひとつとっても、角度にわずかな狂いがあれば作品の構造が変わってしまうからだ。ところが、金場氏の仕事には、緻密な設計図が存在しない。サシガネで測っては、求められた角度を正確に削るために道具や機械で仕上げていくのだ。
「大概のものは、勘でなんとかなる。頭と体で覚えてしまっているから図面なんて必要がない。まあ、漆の艶が程よく映える曲面とかは、CADじや表現できないだろうけどね」と金場氏。指物木地は漆を塗ることが前提にされるため、漆の厚みを想定しなければならないが、作品の用途や塗りの技法によって微妙に変わってくる。塗りの工程を経て、はじめてフタがぴったり納まるよう計算された箱などは、まさに職人技の極みといえよう。



金場正一（かねば しょういち）

表彰・受賞歴

昭和48年 全国漆芸展富山県知事賞
平成4年 日本漆芸協同組合連合会表彰
平成9年 伝統工芸品産業功労者表彰(中部
道産局長)
社団法人日本漆芸協会表彰

経歴

昭和20年 川端芳雄氏に師事し漆芸木地加工の技術を習得
昭和32年 独立自営、現在に至る
昭和54年 伝統工芸士に認定(指物木地部門)
平成7年 高岡市伝統工芸産業技術保持者に
指定(指物木地部門)

①鉋
鉋は、形状もサイズもさまざま。作品の形状や削る箇所に合わせて使い分けるが、適したもののがなければ、新しくつくるなければならない。ひとつの作品だけのためにつくった鉋も多いといふ。

②留め
決められた角度を削るときに使う。留めの角度は、垂直の板を四角形に組む場合は45度、八角形なら22.5度など決まっているが、板に勾配(傾斜)をつけると、それに従って留めの角度も変わる。

③自動鉋
粗削りや木取りは、機械の導入で生産効率が飛躍的に高まった。自動鉋の刃も、金場氏自身がつくる。



第四〇回富山県デザイン展

学生のデザイン力が充実



〈優秀賞〉折りたたみ自転車／土肥匡晴



国立高岡短期大学専攻科産業造形専攻

職人の技と学生のデザインが女性のニーズをキャッチ。

高岡のヤスリ職人、岡崎喜久治氏が製作したネイルファイル（爪磨き用のヤスリ）に、高岡短期大学専攻科産業造形専攻の学生らが製作した木製ケースを付けた作品が人気を呼んでいる。平成十二年十一月、同短大の学園祭で初めて展示販売したところ、二日間で二五点が完売したほか、追加注文も舞い込んだ。

そもそもネイルファイルは、岡崎氏が

三年前からステンレス板を加工し、改良を重ねてきたもの。表と裏で日の並び

を変え、爪を削り、滑らかに磨く両機能を持たせた点が特長だ。そのヤスリを

偶然、目にした学生が「付属のケースを作りたい」と岡崎氏に持ち掛けたことか

ら、共同製作が実現。小松研治助教授と

学生四人が、木の弾力性や色・風合いを

生かし、女性がバッグやポケットから手

軽に取り出しができる実用的なデザイ

ンに仕上げた。

学園祭では、日本で数少ない手づくりヤスリ職人の岡崎氏の紹介パネルや、市販の商品と競い比べできる「一ナード」を設けて、ネイルファイルの魅力を戦略的にアピール。一千五百円から四千円と高めの価格にもかかわらず「切れ味が滑らかで、市販の商品とは爪の輝きが違う」「出し入れ簡単で、清潔感もある」と大好評で完売した。さらに、学

園祭を訪れた東京の木工道具販売業者や高岡の設計事務所などから、新たに三二点の製作依頼があった。

小松助教授は「限られた日数や費用の

中で懸命に改良を重ねていく、そのフ

ロセスを大切にしたことで、魅力ある

作品が生まれたのだと思う。今後も、地元の企業や職人の方と連携した取り組みを続けていきたい」と意気込みを話している。

（岡崎喜久治氏）

（岡崎

素材 & 技術

人にやさしい素材で 金属食器の開発

食器ひとつと高岡鋼器にはあまり馴染みのなかた分野がある素材の研究を機に新しい市場として期待されている。その素材とは、高岡市デザイン・工芸センターが実用化を目指している鉛レス素材。環境汚染や人体への影響が指摘されている鉛を、銅合金から排除しようといふものだ。平成十一年度に実施した各種の実験では、スズやビスマスなど鉛の代替素材を使った五素材の適性を分析。鉛レス素材の成分配合比を決めた。平成十二年度には、引き続き「商品開発プロジェクト」を実施。鉛レス素材による試作品の企画・製作に取り組んだ。呼びかけに応じた高岡鋼器の関連企業五社に、プロダクトデザイナー・安次富隆氏と「デザインプロジェクトユーザー・立川裕大氏をアドバイザー」として交えたセッションでは、流通・製造・デザインのスペシャリストによるコンセプトワークを実践した。マーケティングを含めた幅広い視点から方向性を検討した結果、素材の安全性をアピールしながら、新しい市場を開拓するアイテムとして食器を設定。高

私たちが生活していく上で欠かせない水道。近年、水道用部材などに使用されている合金から鉛成分が溶出し、人体に与える影響が懸念されている。このことから、厚生労働省は鉛の溶出を水一リットルで現行の〇・〇五mgから平成十五年には〇・〇一四mgに水質基準を強化する見込みである。高岡市にはこれら水道用部材の分野で、環境面やリサイクルに配慮した開発を進め、全国展開を図っているメーカーがある。

モノづくりの町・高岡を下から支えているのが、新しい素材や技術の開発。起業家精神に満ちあふれた技術者たちが日夜研究にいそしみ、新素材・新技術を生むべく努力している。ここではその基礎となる新しい素材や技術の開発動向をレポートする。



新水質基準に対応した 環境にやさしい新合金の開発

水道栓のバルブ部品や水栓金具には黄銅素材が多用されている。加工のしやすさ、つ

まり切削性向上のために従来一八・三・七%の鉛が含まれていたが、水質基準の観点から業界では鉛レス化が課題となっていた。

これにいち早く対応する商品開発を進めたのが黄銅棒製造で国内トップシェアを誇るサンエツ金属(本社高岡市)である。同社では鉛の代替素材にビスマスを添加物として使用し、鉛をほとんど使わない新合金「スーパー鉛レス黄銅棒」を開発。既に大手バルブメーカーの評価試験において切削性は従来と同等の性能を有し、他社の鉛レス製品との比較では約二倍、引張強さ、伸びは従来と同等という高い性能を保持している。

また同社の鉛レス黄銅棒は、この水回りの部品をはじめガス栓などの住宅関連、また自動車部品やパソコン、携帯電話のビンやアルカリ電池の集電棒など多様な分野で用いられている。



環境配慮型の脱塩ビ&鉛レス コア継手を開発

一方、前述の新水質基準に対応するため水道用配管の継手にも鉛レス素材が実用化されている。開発したのは鉄管継手メーカーのシーケー金属(本社高岡市)である。異種金属接触防止型と呼ばれる継手内部には、これまで鉛を含んだ青銅部品が組み込



伝統工芸産業の後継者育成

伝統工芸の技術を次世代に残し、かつ新たな技法を興して伝統の礎を築こうとデザイン開発が進められた。完成した試作品は、素材のバリエーションも金属をはじめ木やガラスなど多種類にわたり、昨年開催された「素材と技術展」(特集参照)に出品。平成十三年度には、漆器の商品開発も含め、試験的にインテリアショップなど市場へ展開して一歩反応を探る予定である。

高岡市では、金工や漆器の後継者育成を目的に、卓越した技術を有する著名な工芸作家を招いて短期の技術伝承講座を開催している。平成十二年度は、二月に山下義人氏(日本工芸会正会員・香川県漆芸研究所工芸指導員)を迎えて、四国・香川漆器に伝わる技法「蒟蒻」の講座を実施した。蒟蒻とは、漆の塗装面を蒟蒻剣で彫り込み、その溝に色漆を充填させ、乾燥後に研ぎ出して文様を浮かび上がらせる技法。東南アジアを起源とし、異国情緒あふれる文様が特徴的だ。江戸時代、高松の漆工芸家、玉橋・象谷によつて伝えられ、現在では彫り重ねなど複雑な色調が工夫され、新しい表現が開拓されている。この高岡漆器にはない独特の技法を習得すべ

伝統工芸産業の後継者育成 技術伝承講座

伝統工芸の技術を次世代に残し、かつ新たな技法を興して伝統の礎を築こうとデザイン開発が進められた。完成した試作品は、素材のバリエーションも金属をはじめ木やガラスなど多種類にわたり、昨年開催された「素材と技術展」(特集参照)に出品。平成十三年度には、漆器の商品開発も含め、試験的にインテリアショップなど市場へ展開して一歩反応を探る予定である。

伝統的工芸品 技術・技法継承者育成事業

高岡市デザイン・工芸センター

技術・技法継承者育成事業

高岡市デザイン・工芸センター

Information from 高岡市デザイン・工芸センター

平成13年度工芸体験実習開催予定

高岡市デザイン・工芸センターでは、平成13年度に下記の工芸体験実習を予定しています。諸事情により日程や内容が変更する場合もありますので、ホームページもしくはお電話にてご確認ください。

■親子体験実習(1回コース) 親子2名1組(子どもは小学3年生以上)

	日 程	内 容
金 工	平成13年 7月 8日(日)	鎔物で日時計をつくる
漆 工	〃 8月19日(日)	銀粘土でキーホルダーをつくる
	〃 7月22日(日)	蝶籠で石のペーパーウェイトをつくる
	〃 8月 5日(日)	塗りガラスのマイカップをつくる

■市民体験実習(1回コース) 15歳以上

	日 程	内 容
金 工	平成13年 9月16日(日)	鎔物で時計をつくる
漆 工	〃 12月 2日(日)	銀粘土でアクセサリーをつくる
	平成14年 2月 3日(日)	鎔物でフォトスタンドをつくる
	平成13年 5月27日(日)	紙絵でアクセサリーをつくる
	〃 12月 16日(日)	蒔絵で羽子板をつくる
	平成14年 2月 17日(日)	蒔絵で雛人形をつくる

■市民工芸実習(4回コース) 15歳以上

	日 程	内 容
金 工	平成13年 11月 9日からの毎金曜(3回目は11月22日(木)になります)	蝶型で小物をつくる
工芸	平成14年 3月 1日からの毎金曜	鍍金でうつわをつくる
漆 工	平成13年 6月 8日からの毎金曜	変塗と蒔絵で銘々皿をつくる
	平成13年 11月30日からの毎金曜	変塗でマット・椀・箸をつくる

高岡市デザイン・工芸センター

〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク5番地
TEL0766-62-0520 FAX.0766-62-0521
http://www.suncenter.co.jp/takaoka/

平成十二年度の育成者は漆器・塗りの技法を有する源謙次氏で、継承者は新宮尚子さん。新宮さんは兵庫出身で金沢美術工芸大学では陶芸を学び、現在は高岡に在住、主婦の傍ら陶芸作品を制作している。

大学の頃から漆器に興味があったことから前述のスクールで漆器を修了後、もっと技術を身に付けてみたいということでこの指導にトライしたという。一年間学んだ新宮さんは「焼き物の仕上げは多少粗っぽくて作品はできるんですけど、漆塗りの技術はどうも繊細さが問われ、ちょっとした傷に心を遣いますね。また道具の扱いもた



双方を分離することなく金属のリサイクルができるという利点がある。

ポリエチレン樹脂は付着・接着性が悪いためこれまで敬遠されてきたが、同社では独自の表面改質を施し実用化を図った。

業界初の脱塩ビ・鉛レスの継手はゼネコンはもちろん、設計事務所や施工者から直接指名を受けるケースも増えた注目されている。

また燃焼が不完全だとダイオキシンが発生するという環境問題が生じるため、継手の金属部分をリサイクルする際には塩化ビニールを分離して設備が腐食する。また燃焼が不完全だとダイオキシンが発生するという環境問題が生じるため、継手の金属部分をリサイクルする際には塩化ビニールを分離していた。一方、ポリエチレン樹脂は燃焼しても有害物質が発生しないため



脱塩ビ・コア内蔵の管端防食継手

メイド・イン・高岡 セレクション

「モノづくりの町」と形容されるとおり、いま高岡では、新技術を駆使してデザインされた商品やコンペ入賞作品を商品化したプロダクトなど、素材、技術、デザインにこだわったモノがいくつも生まれています。その中から、暮らしを楽しく彩る商品をセレクトしました。

使い心地のいい「お気に入り」、こだわりの高岡ブランドの中から見つけてみませんか。



6 景観をトータルに演出するタウンズスパイシーシリーズ

調和、機能、エコロジーをテーマに、アルミニウムの金属感を生かして公共空間全体のデザイン統一を図る景観商品です。内照式のストリートサインは発光ダイオードと太陽電池の採用で、維持費の削減とクリーンエネルギーを実現。ベンチは、座面やキャップに再生ゴムを利用してリサイクル性と座り心地に配慮。2000年度のグッドデザイン賞を受賞しました。

サイズ(重量)／ストリートサインH465.5cm(約380kg)、ベンチW190×H42×D55.1cm(約50kg)●ベンチの素材／アルミ、再生ゴム(壳タイヤリサイクル品)●価格／ストリートサイン:3,500,000円(工事費・ポスター費別途)、ベンチ:280,000円(工事費別途)●問合せ／三協アルミニウム工業㈱☎0766-20-2383



5 お気に入りのCDをおしゃれなインテリアに変えるCDフレーム

CDジャケットを手軽にディスプレイできるアルミニウムCDフレーム。壁に掛けたり、フォトフレームのように机やテーブルの上に飾ったりと、CDジャケットをお部屋のインテリアとして楽しめます。数量がまとまれば、特注色や名前・メッセージの刻印も可能。企業の記念品や結婚式の引き出物として贈るのも素敵なアイデアです。

●サイズ／W14.3×H12.7×D1.2cm●素材／アルミ合金●カラー／シルバー●価格／600円※CDは付属していません
●問合せ／ホクセイプロダクツ㈱☎0766-29-1600

7 アルミのインテリア

クロック「Truth & Nature」…船舶の窓枠などにも使用されている高耐食アルミを使用。いつまでも美しいテクスチャーとシンプルなフォルムが溶け合うインテリアクロックです。

マウスパッド「tripad.」…リサイクルも可能な天然素材・リノリュームを、マウスパッドとしては世界で初めて製品化。フレームのアルミリングは、シャープな光沢が高級感を引き出しながら、たわみを抑え耐久性を高めます。

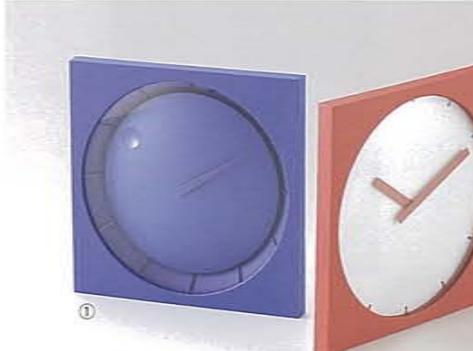
①(KS2-921A)●サイズ／W10×H15.5×D4.5cm●価格／5,800円②(KS2-920A)●サイズ／W10×H12×D4cm●価格／5,000円③(KS2-904A)●サイズ／W7.9×H11.2×D3.8cm●価格／4,800円④(tripad.)●サイズ／20.6×21.6cm●主材料／アルミ・スウェーデン製リノリューム●価格／3,800円●問合せ／株タカタレムノス☎0766-24-5731



8 シンプルな機能美が心地いい集合住宅用インターフォンユニット

照明・部屋番号・ネームプレート・インターフォン・新聞受けと玄関に欠かせない機能をコンパクトにまとめた、インターフォンユニット。建築家の高市忠夫氏によるシンプルで飽きのこないデザインは、現代的なマンション建築にやさしく溶け込みます。本体にはアルミニウムとステンレスを採用。鋲びやキズに強く、住まいの顔をいつまでも美しく保ちます。

●サイズ／W15×H81.5cm、W15×H51cm●素材／アルミ、ステンレス●カラー／ステンカラーフロンズ、シルバー(特注色も可)●価格／20,000円より(工事費別途)※インターフォン子機・本体、名前は別途手配願います●問合せ／北陸アルミニウム㈱☎0766-31-4300



9 「HOLA」「ILUS」

天体の動きを象徴化したデザインで、スミソニアン・クーパーハーリー美術館(米国)から『The Clock』という称号を授与された「HOLA」。ベーシックを基本コンセプトにした「ILUS」は、時刻の視認性に優れたシンプルな文字盤。どちらも、プロダクトデザイナー・川崎和男氏によるデザインで、2000年度Gマーク・ロングライフデザイン賞を受賞しています。

①(HOLA)●サイズ／W20×H20×D 3.7cm●重量／370g
●主材料／ABS・ガラス●カラー／9色(ブラック、モスグリーン、パープル、ブルー、ホワイト、グリーン、グレー、レッド、イエロー)●価格／5,000円
②(ILUS)●サイズ／W20×H20×D 3.7cm●重量／370g
●主材料／ABS・ガラス●カラー／5色(パープル、レッド、イエロー、ブラック、モスグリーン)●価格／3,000円
●問合せ／株タカタレムノス☎0766-24-5731



1 個性的でエレガント、しかも実力たっぷりのホイール「ニューBBSプリマドンナ」

ゴージャスな色づかいとデザインは、オシャレにこだわる大人の女性にぴったり。エンブレムには赤と黒があり、TPOに合わせてコーディネートが楽しめます。しかもアルミニウム鍛造なので鑄物製に比べ約20~30%も軽く、走行性能や耐久性に優れています。F-1、ル・マンなど、世界のメジャーレースで圧倒的な装着シェアを誇るBBS、そのホイールは高岡でつくられています。

●素材／アルミニウム(ACO®航空機材質)※キャップ・ナット・バルブ等ゴールド色は24金メッキ、耐摩耗クリアコート仕上げ●エンブレムカラー／赤、黒●サイズと価格／17inch×7.0~9.0:170,000~190,000円、18inch×8.0~9.0:200,000~220,000円(各1本)※エンブレムはホイール1本につき赤、黒各1個ずつ、計2個同梱します●問合せ／ワシマイヤー㈱☎0766-31-0021



2 金属と木が美しく融合した新仏具「鉢詩型(こしがた)」

高岡仏具と庄川木工の伝統技術を生かした新仏具。槐の天然木から上品に浮かび上がるゴールド、木目模様とフォルムの緩やかな曲線が優しくあたたかな雰囲気を醸し出しています。家具調の現代仏壇によく似合う、シンプルでモダンなデザインは、高岡市デザイン・工芸センターとのコラボレーションによるものです。

●サイズ／花立7φ×H10cm●素材／槐(えんじゅ)、真鍮、金メッキ●セット価格／50,000円●問合せ／株笠原昇雲堂☎0766-21-1858



3 光を楽しむ知的なキットバスタランプ

バスタに明かりが灯る、かわいい照明クラフト。キッチンのカウンターやテーブルに置けば、幻想的な光がお客様をあたたかく迎えてくれます。ドライフラワーなどをつけたり、和紙を張ったりすればいろいろな光の表情が楽しめるのも魅力。自由な発想で、オリジナルの光づくりに挑戦してみませんか。

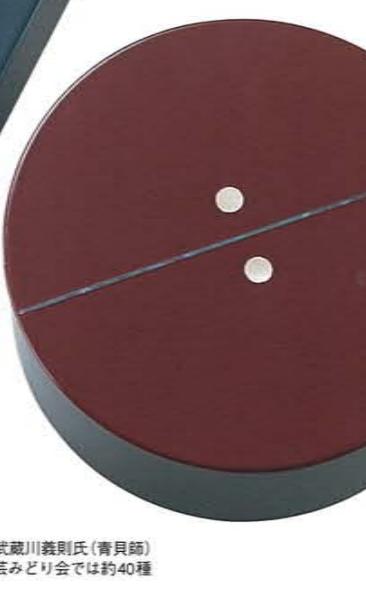
●サイズ／W13×H25×D8cm●素材／高耐食性アルミニウム(AC-7A)●定格／100V-5W E12なつめ球●価格／4,800円※バスタ、ドライフラワーは付属していません●問合せ／株ニュース・インターナショナル☎0766-28-2210



4 独特の色合いを表現するウレタン塗りの生活雑貨

高岡漆芸みどり会と高岡市デザイン・工芸センターとの共同研究で誕生。漆の代わりにウレタン塗料を吹き付けたもので、落ち着きのある色合いと上品なツヤが魅力です。また、青貝塗や彫刻塗など高岡漆器の伝統技法を使って装飾しながらも、時代に合わせた使いやすいデザインを追求。手ほどよくなりむ大きさや形はシンプルで、和の室内装飾にも洋のインテリアにもマッチしそう。

●サイズ／ニュースペーバーラックW30×H14.5×D6cm、ポストカードラックW15×H7.3×D5.5cm、レターラックW28×H4.3×D11.3cm、ドラッグBOX・丸16φ×H5cm、ドラッグBOX・角W13.7×H4.3×D13.7cm●素材／木、ウレタン塗装●カラーと価格／ニュースペーバーラック10,000円：黄・青、ポストカードラック6,750円：黄・青、レターラック8,500円：黄・ドラッグBOX・丸7,500円：黄・青・ワインレッド、ドラッグBOX・角7,500円：黄・青●問合せ／高岡漆芸みどり会☎0766-21-6132



青貝塗の装飾を施した武蔵川義則氏(青貝師)の作品。この他、高岡漆芸みどり会では約40種類を開発。